

折口といふ名字

折口信夫

青空文庫

折口といふ名字は、摂津国西成郡木津村の百姓の家の通り名とも、名字ともつかずのびて来た称へである。

木津村は今、大阪市南区（現在更に浪速区）木津となつた。所謂

「木津や難波の橋の下」と謡れた、^{イタチ}鼬川といふ境川一つを隔て、

南区難波、即、元の難波村と続いてゐる。東は今宮、西は南町と

言ふ、かの渡^{ワタナベ}辺で通つた、えた村である。此二つの村との間に

は、十年前までは畑も見られたが、今は、両方から軒並びが延びて来て、地境を隠して了うた。南町は、関西鉄道の線路敷が高い^{どて}を横へてゐなかつたら、今頃は、名実ともに、百年二百年毛嫌ひを増上させて来た部落と、見わけがつかなくなつたはずであ

る。南町は、事実、木津西浜町・木津北島町並びに、木津勘助町・木津三島町の一部になつて、呼び名の上では、区別はなくなつてゐるのである。村人の考へてゐる昔は、極近いおほざつぱなものである。どこまでが物識りの入れ智慧で、どこからがすなほに伸びて来た物語かは知れぬ。とにかく、木津は島であつた、と言つてゐる。そして其頃から、今の願泉寺と言ふ寺はあつた。浜辺に寺一字建つてゐる図どりの掛けぢが、今も、かの寺にはあると言ふ。

願泉寺門徒の、石山合戦に働いたことは、人馬講ニンマと言ふ願泉寺檀徒の講衆が「西ニッさん」の法会に京へ上ると、他の国々の講衆の一番上席に据ゑられるのでも、証拠だてることが出来ると誇つてゐる。

折口の家は、わたしの生れた鷗町一丁目の家を、ところでは、本家と考へてゐる。静と言ふ兄の立てゝゐる此家は、折口姓を名のる家の中では、一番長い軒・広い屋敷を持つてゐる為、一見腹膨れらしく見える処からの思ひ違ひで、本家は、別にあるのである。木津勘助町の二丁目と三丁目との間を、南町の方へ走る電車道が通つてゐて、そこに、勘助町の停留場がある。其辺が昔は、田傍（たばた）と言ふ小名であつた。老人は今も、さう呼んでゐる。其処は、又杖風マタフリになつた辻で、北から来て、つき当つた鋭角の先に、地蔵堂の大きなのがあつて、たばたの地蔵さんと言つた。此堂も今は、電車道敷の為に、此頃歸つて見たら、石の小さなお厨子の様な物を、北よりの人家の軒によせて拵へて、移してあつ

た。

此地蔵堂の後、又杖の西側の枝にあたる勝間（こつま）街道に向うて、はなやと言ふ通り名の家があつて、やはり、折口を名のつてゐた。此が、折口の本家である。家の親類ではあるが、血筋はすつかり、切れて了うてゐる。当主の清吉セイといふ人は、小学では同級で、青涕あをばなを初中終啜つてゐた、おつとりした子であつたが、此家も、電車道に屋敷を奪はれて、折口の古屋敷は亡くなつた訣なのである。

子どもの頃、誰かゝらはなやは、鼻家ハナヤ・端屋の意で、崖の上にあつたので、扱こそ、根来落ちには道案内もした訣なのだ、と言ふ理のつんだ様な話を、聞かされたやうに思ふ。

併し、或はたばたの折口が、何時の頃にか衰へて、唯泉寺・願泉寺・田傍地蔵の花を売つた様な事が、あるのかも知れぬ。唯、花屋といふ商売を、賤業と見なしてゐる徳川頃に、如何におちぶれても、仏の花を商うてゐる家を、旧家七軒の中に数へなかつたであらう。なる程、人馬講の名の様な活動を、此村の草分けの人々がした頃には、或は此木津が、本願寺附属の、童子村・神人村風の処だつたかも知れぬが、所謂賤種階級を数へることの整うて後の江戸末期に、此村の古い家が、情ない商売をしようとも思はれぬ。弁解ではないが、本家とも言ふべき家が、妙な屋号を持つたことについて、疑ひを起さぬ訣にはいかぬ。先年亡くなつた祖母も、百姓一まきの家としての、所謂はなやを知つてゐるばかりで、

花を売つてゐたことは知らぬ、と云うてゐた。此屋号は、はなやといふ音の第一綴音に、音勢点があるので、今の大阪語の花屋は、其音勢が亡くなつてゐる。今を標準とすれば、勿論、花屋ではない、と言ふことは出来る。

しかし、音勢点の時代的移動や、熟語を作る際の抑揚移転を、考へに入れてかゝらぬ様な語原解釈は、無意味である。今の、あくせんとを標準とした此はなやの説明は、唯説明が出来ると言ふだけで、さうに違ひない、と言ふ証拠には、ちつともなつてはくれぬ。併し何にしても、家の為には花屋でなく、鼻屋であつた方がよいか、と思ふ心が、かう書いてゐる間にも、強く動いてゐる。折口の降り口であることだけは、根来落ちと關係を切り放しても、

確かさうである。金田一京助先生は、あいぬ語の ru-essan が、折口に当つてゐる、とわたしの家の名義の話を聴いた末に、言はれたことがある。又、近頃発表せられたあいぬの詞曲「虎杖丸」の註釈で、

るゑさん ruwessan, ru-essan 道の出口（浜の大道へ出る口）

の事なり。下り口オの義なり。ru は道にて、essan の e は接頭

語、san は出る意味なり。又下る意味なり。要するに、後方

の高い処より、前方（浜）の低い方への運動なり（雑誌あらゝぎ大正七年六月号）。

と説明して居られる。誠によく似た、語の出来ぐあひである。単に語族が一つだ、と言ふだけで、縁もゆかりもない、北の島人の

語ばかりでなく、ほゞおなじ語を話し、兄弟の情を持ちあつてゐる我々の間には、勿論、同じ組織の語で、似た地形を表す事になつてゐる。

子どもの頃、よく印刷屋の表に立つて、為入れの三文判の出し箱ダに並んでゐる判の中から、折口とあるのを見つけようとして、折田・折目など言ふ姓に出逢ふばかりなのに、肩身狭い思ひのした事を覚えてゐる。古子姓を立てゝゐる、仲の兄進が、造士館高等学校の生徒で、まだ汽車の矢嶽を越えなかつた頃、薩摩領に入つたとある立て場で、馬車の窓から、折口と書いた茶屋の表札を見て来た話を聞いて、兄弟、若い心に名状の出来ぬ心強さと、不思議さを感じ合つたことであつた。其後地図で見ると、其立て場

のあつた、と思はれる処から西へ離れて、折口と言ふ大きな村のあるのを見つけて、其村から出た家であつたものかと考へた。地名索引から拾ふと、

折口（をりくち）薩摩出水

折口（をりのくち）武蔵榛

沢

をりのくちの方は、のの割りこみ方が、聊か異風ではあるが、おりをおりみちななど言ふ過程を含んだ語と見れば訣る。

折戸（をりと）尾張愛知 上総武射 下野塩谷 羽前西置賜

能登珠洲 越後西頸城 折戸（をりど）駿河有渡 越

中上新川 越前阪井

此等は、降^オり^ト処で、降り口でなく、降り立つた場所であらう。

折立（をりたち）大和吉野

折立（をりたて）下総印旛

越前大野

折立（をりだて）美濃方県

下り立つた麓の地である。

折居（をりゐ）越後西頸城

同刈羽

同北蒲ノ沢

折井

石見那賀

右と同じ意味の地名。降り坐オである。多武峰の北口にも、下居を

おりゐると訓む地がある。折井は、甲州出の三河武士の本貫と見え、家康の旗本に、強の者折井氏があつた。

折坂（をりさか）出雲能義

折方（をりかた）播磨赤穂

折原（をりはら）武蔵男衾

折平（をりひら）三

河西加茂

折田（をりた）上野吾妻

折津（をりつ）

上総市原 折橋（をりはし）常陸久慈 折野（をり

の）阿波板野 折尾（をりを）筑前遠賀 折崎（を

りさき）肥後玉名 折地（をりぢ）筑後下妻 折元

（をりもと）豊前下毛 折谷（をりたに）加賀河北 越

中上新川 折木沢（をりきさは）上総望陀 折尾瀬

（をりをぜ）肥前東彼杵 折生迫（をりふさこ）日向北

那珂 折宇（をりう）阿波海部

折井は、折坐とおなじ地形を言ふので、其よりも、古い時代に出
来たものであらうか。

折合（をりあひ）土佐幡多 折木（をりき）磐城檜葉

折茂（をりも）陸奥上北 折浜（をりのはま）陸前

牡鹿

此ほかにも、

織笠（をりかさ） 陸中東閉伊

織島里（おりじまがり）

肥前小城

織豊（おりとよ） 尾張愛知

などあるが、織笠の折笠と同じ語らしいものゝ外は、其意をたどる事も出来ぬ。辞典によると、

折峠（をりたうげ） 越後岩船

下津（おりつ） 尾張中島

下立（おりたち） 越中新川

小里（をり） 美濃土

岐 折壁（をりかべ） 陸中東磐井

折紙鼻（をりか

みばな） 長門豊浦

折敷畠（をりしきはた） 安岐佐伯

右の中、小里は、小里^{ヲリ}出羽守など言ふ、戦国の武人の本貫である。

摂津の遠里ヲリ（とほさトではない）小野ヲノなど、同類で、折り廻タむ道の意であらうから、降オりるとは没交渉らしい。

折口は、木津の地では、一切おりぐちと濁つて言ふ事はない。字の宛て方がうまかつたのか、外に訓み方もない為か、時々、おれれくちと不吉な訓みをつけられる事があるばかりで、大抵始めて此妙な名字に出くはした人にも、すらりと通る様である。併し、おれれくちと清んで訓んでくれる人は、あまりない。此頃では、どうかするとおりぐちと言うて、自分乍ら、ずぼらになつたのに、驚く事がある。

明治四十二年の天満焼けのをり、朝日・毎日の二つの新聞で募つた義捐金に、喜捨した人の中に、淡路三原（或は津名）郡何村の

折口某と言ふ姓名が見えた。目のよる処に玉とやらで、注意してゐた為か、其頃南区二つ井戸に近い上大和橋の辺から、身投げして助けられた女の人の名字も折口で、此は播州生れであつた事を、やはり新聞で知つた。其頃は、折口が地形の名で、幾百里離れてゐても、苟も日本の土地でありさへすれば、何の聯絡なしに、勝手に幾らでも出来るはずの家名だ、とたかを括る様になつてゐた為、書きとめて置かなんだのが残念である。

物心づいたわたしが見知つた、木津中の折口には、七軒あつた。

折清（をりせ、代々清兵衛・清吉の立てゝゐる家）・折佐（をりさ、佐兵衛の後家よねといふ年よりが、今も生きて、兄の家に入りしてゐる。其孫の佐吉と言ふのが、博打^{バクチ}うちになつて、より

つかぬさうである)・折治(をりぢ、当主治兵衛は、新町辺で貸座敷をしてゐる)・彦右衛門(代々折口彦右衛門で、今は簾屋である)・折口げん(今は亡びた。此家の妹娘は、中村雀右衛門と言ふ役者の妻とか、妾とかになつたと聞いた)・折口ゆき(わたしの七八つの頃、村の南のはづれに近い裏家に、此表札を見た。主人は其頃六十恰好の女であつた)、其外に、よねの継子で、勘当同様に家を出されてゐる市松と言ふのが、木津の中、何処かに住んでゐるはずである。

兄進の知人日足重亮と言ふ人の話では、東京本郷座の辺に、折口冬と言ふ女名前の宿屋があるさうである。古顔の壮士役者中村秋孝といふ人の妻のよし。母に訊くと、其はやはり家の親類で、三

十年程前まで、隣りあひであつた豆腐屋の娘で、堀江で茶屋を出してゐた者だ、と云うてゐた。

兄静の立てゝゐる家は、代々折口彦七で、曾祖父・祖父の二代は岡本屋と言ひ、岡彦と称へた。岡本屋と言ふのは、木津の名主で、ところから住吉まで二里近くの間、他家の地面を踏まずに、行くことが出来たといふ家である。曾祖父は、其処の番頭になつてゐたので、其屋号を専ら用ゐてゐた。曾祖母登代といふのが、非常な賢婦人で、諸芸・読み書き、何でも出来た人である。つぶれかゝつた家を、女手で引き起して、飛鳥造酒之介・上野つたの二人を養子にして、家を護つた。登代の継子（曾祖父彦七のうきよの子）彦次郎といふのは、学問嗜きであつたが、放蕩であつた為、勘当

した。祖父彦七の代に、熊野から来た六十六部が、彦次郎が尚、熊野に生きてゐて、寺子屋を開いてゐるよしを伝へたさうだから、熊野の何処かには、家と深い関係のある折口が、一軒残つてゐるかも知れぬ。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 3」中央公論社

1995（平成7）年4月10日初版発行

底本の親本：「『古代研究』第一部 民俗学篇第二」大岡山書店

1930（昭和5）年6月20日

初出：「土俗と伝説 第一卷第二号」

1918（大正7）年9月

「土俗と伝説 第一卷第四号」

1919（大正8）年1月

※底本の題名の下に書かれている「大正七年九月・八年一月」「土

俗と伝説」第一巻第二・四号」はファイル末の「初出」欄に移しました

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2007年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

折口といふ名字

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>